

〔講義稿〕 古代の四声と普通話の四声の対応関係

著者	太田 斎
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	76
ページ	95-131
発行年	2010-03-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000541/

〔講義稿〕 古代の四声と普通話の四声の対応関係*

太田 齋

1. 普通話（＝北京語）の声調

普通話には次の四つの声調の違いがあり、これを総称して「四声」と呼んでいる。

具体的には以下の通り：

第一声：高平調（55）、

第二声：上昇調（24）、

第三声：下降上昇調（214）、

第四声：下降調（51）

（ ）の中のアラビア数字は声の上がり下がりやを 5 段階の高さで表示したもの。初級教科書の冒頭に見られる各声調の声の上がり下がりの図を数字で示したものとせば良い。通常の発話で用いる声の相対的な高さの最高を 5、最低を 1、高からず低からずを 3 とする。上の四つの異なる声調の一つ一つ（第一声、第二声、第三声、第四声）を「調類」といい、その「調類」の一つ一つに備わった声の高さの具合、上がり下がりの様子を「調値」という。上でアラビア数字で示しているものがそれである。例えば第一声の 55 は始発高度が最高 5 から、その高さを維持したまま終末高度 5 へと直線的に移行することを意味している。第二声の 24 はやや低いところ 2 からやや高いところ 4 へ直線的に移行する（35 とするものもあり）。第三声の 214 はやや低いところ 2 から一旦最低高度 1 へと下がり、それから上昇に転じて、やや高いところ 4 へと移行する。始発高度と終末高度だけを取るなら、第二声の 24 と同じになってしまうので、この場合は屈折点の高度も加えて、三つの数字で表す。第四声 51 は最高の高度から一気に最低の高度へと下がる。数字による表記には馴染みが無くとも、これらの特徴は中国語を勉強した人には周知の事柄と言えよう。これら以外に轻声というのがあるが、轻声は上の四つの声調のように独自の声の高さの変化があるのではなく、本来これら四つの声調のいずれかであったものが、軽く発音されることで、声の上がり下がりが不明瞭になってしまったものである。不明瞭の度合いは様々で、日本語の「の」に相当する「的 de」や動詞アスペクトマーカの「了 le」、「着 zhe」、名詞接尾辞の「子 zi」、「衣裳 yīshang」の「裳 shang」のように、常に全く声の上がり下がりが聞き取れないように発音されるもの（最初の 3 例は韻母のかたちも相当くずれてしまっている）ものもあれば、同じ字

でもどのような語（句）の中に現れるかで違ったり、また地域により、人により、声調のかたちが現れたり、現れなかったりといったパラツキを示すものもある。だから、軽声は別扱いにして、これらと同列に扱うことはしない。二音節語の変調状況を表にすると以下の通り：

前字 後字	第一声	第二声	第三声	第四声
第一声	55+55(不変)	55+24(不変)	55+214(不変)	55+51(不変)
第二声	24+55(不変)	24+24(不変)	24+214(不変) 	24+51(不変)
第三声	214+55→21+55	214+24→21+24	214+214→24+214	214+51→21+51
第四声	51+55→53+55	51+24(不変)	51+214(不変)	51+51→53+41

第三声が二つ続くときには前の第三声は第二声と同じ 24 になるという変化があり、第三声に別の声調の字が続く場合には、その第三声は低く平らに発音され、数字で示せば、21 もしくは 11 のようになる。第四声が二つ続く場合もまた、細かいことを言えば、前の第四声は最低にまでは下がらず、53 くらいになり、後ろの第四声は始発高度が少し低いところから始まり、41 のようになる。第四声+第一声の場合の第四声もやはり末端高度は 1 までには下らない。このような、他の字と組み合わせるときに発音されるときに現れる、一字の場合とは異なる上がり下がりや教育の場では単に「変調」と言っているが、厳密には「連読変調」と呼ぶ。「連続変調」の間違いではない。これは中国語の用語をそのまま用いている。中国語の「读 dú」には発音するという意味もあることに注意。英語で tone sandhi という (sandhi は古代インドの術語) ので、「トーン・サンディー」というふうと呼ぶ人もいる。そもそも日本語にはない現象に関する用語なので、「連読変調」で構わないだろう。通常、一字一字の声調の上がり下がりやを云々するとき、単独で発音した場合の上がり下がりやで代表させ (これを「単字調」と言う)、それ以外の場合に現れる異なった上がり下がりや「単字調」が、それぞれの異なる環境、具体的にはどのような声調の字が後続するかに応じて、違った形で現れたものというふうに見なす。特に断り無く、歴史的な声調の変化を云々するとき、そこで対象となっている声調は普通は「単字調」の上がり下がりやであって、「連読変調」のそれではない。但し、古い時

代の声調の高低、上がり下がりによく分からないので、歴史的な「調値」について語られることは余り無く、通常は「調類」の今と昔の対応関係が問題とされる。

普通話の発音は北京語を基礎としている。そしてそれに言語政策の手が入ったものである。個々の字の読み方に関して、北京以外では余り使われないようなものは、「北京方言」として排除されてしまっている一方で（例えば、「蝴蝶儿」の *hùdiě* という読み）、北京語では用いられることのない、上海語の否定辞「勿」が北京語の音韻体系に合わせたかたちで *fiào* という拼音表記で取り込まれている、といったようなケースもあり、細部において普通話と北京方言は違っているのであるが、声母、韻母、声調の総数やそのそれぞれの要素の音声的実質は同じと考えてよい。だから以下で、声母、韻母、声調に関し、普通話の発音として説明しているところは、北京方言の発音というふうにも考えても良い。

2. 古代の発音の枠組み

昔の中国語はどうであったか。文献などで具体的なところを知ることのできる最も古い時代はというと、隋唐代の頃で、隋の仁寿元年（西暦 601 年）に編まれた『切韻』という韻書（中国の伝統的スタイルの発音辞典）からその頃の発音の枠組みを推測することができる。この『切韻』から帰納できる発音体系を「中古音」と言う。以下、「古代中国語」というような言い方をすることがあるが、特に断らない限り、それは「中古音」の時代、つまり隋唐代の中国語を意図している。

『切韻』という発音辞典は先ず平声、上声、去声、入声の 4 種の声調ごとに 4 巻に分けられていて、各巻は韻母の違いによって分類されている。このことから古代の声調は平声、上声、去声、入声の 4 種であったことが分かる。但し、それぞれの「調値」についてはよく分かってはいない。もしその名称が調値を表すものであるならば、平声は平らな調子、上声は上がる調子、去声は去り行く（＝下がる？）調子、入声は入る調子（＝詰まった調子）ということであろう。このうち入声は *-p, -t, -k* といった子音で終わる音節であったから、他の声調に比べ、詰まった調子であったことは確実である。現代方言で末子音を保持している現代方言からもそのような聴覚印象を得ることができる。但しどの声調も高さをその名称から窺い知ることにはできない。この古代の声調体系もまた「四声」と呼ばれることがあるが、平上去入の一つ一つが普通話の第一、二、三、四声と「一対一」に対応している訳ではない。

以下、古い発音がどのようなものであったかを示すために、伝統的な名称はできるだけ省略して、『切韻』の整理から推定される「中古音」の声母、韻母の一覧を、結論だけ先ず示しておく。用いる推定音価は平山久雄「中古漢語の音韻」（牛島徳

次等編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店,1967.11,pp.112-166、音韻論第 3 章) に従う。「全清」等の用語の説明は後出。なお本稿においては拼音と音声記号が混在するので、注意して両者を区別するように。

切韻の声母					
五音 (七音)	全清	次清	全濁	次濁	
唇音	重唇音	p	p ^h	b	m
舌音	舌頭音	t	t ^h	d	n
	舌上音	t̪	t̪ ^h	ɖ	ɳ
牙音		k	k ^h	g	ŋ

齒音	齒頭音	ts	ts ^h	dz	
		s		z	
	正齒音	tʂ	tʂ ^h	dʒ	
		ʂ		ʒ	
	正齒音	tʃ	tʃ ^h	dʒ	
		ʃ		ʒ	
喉音		ʔ			j
		h		ɦ	
	半舌音				l
	半齒音				ɹ

韻母推定音価一覧

ōu ^{平声} , ōu ^{上声} , ou ^{去声} , ouk ^{入声} ;	iəu ^{平声} , —, iəu ^{去声} , iəuk ^{入声}
oŋ ^{平声} , oŋ ^{上声} , oŋ ^{去声} , ok ^{入声} ;	ioŋ ^{平声} , ioŋ ^{上声} , ioŋ ^{去声} , iok ^{入声}
auŋ ^{平声} , auŋ ^{上声} , auŋ ^{去声} , auk ^{入声}	
iě ^{平声} , ie ^{上声} , ie ^{去声} ;	iě ^{平声} , iě ^{上声} , iě ^{去声}
ɣě ^{平声} , ɣě ^{上声} , ɣě ^{去声} ;	ɣě ^{平声} , ɣě ^{上声} , ɣě ^{去声}
ii ^{平声} , ii ^{上声} , ii ^{去声} ;	i ^{平声} , i ^{上声} , i ^{去声}
ɣi ^{平声} , ɣi ^{上声} , ɣi ^{去声} ;	ɣi ^{平声} , ɣi ^{上声} , ɣi ^{去声}
iǎi ^{平声} , iǎi ^{上声} , iǎi ^{去声}	

iǎi ^{平声} , iǎi ^{上声} , iǎi ^{去声}			
Yǎi ^{平声} , Yǎi ^{上声} , Yǎi ^{去声}			
iə ^{平声} , iə ^{上声} , iə ^{去声}			
o ^{平声} , o ^{上声} , o ^{去声}	;	yu ^{平声} , yu ^{上声} , yu ^{去声}	
ei ^{平声} , ei ^{上声} , ei ^{去声}			
uei ^{平声} , —, uei ^{去声}			
—, —, iei ^{去声}	;	—, —, iei ^{去声}	
—, —, Yei ^{去声}	;	—, —, yei ^{去声}	
—, —, ai ^{去声}	;	—, —, uai ^{去声}	
ai ^{平声} , ai ^{上声} , ai ^{去声}			
uai ^{平声} , uai ^{上声} , uai ^{去声}			
ei ^{平声} , ei ^{上声} , ei ^{去声}			
uei ^{平声} , —, uei ^{去声}			
—, —, ai ^{去声}			
—, —, uai ^{去声}			
li ^{平声} , li ^{上声} , li ^{去声}	;	—, —, li ^{去声}	
Yli ^{平声} , Yli ^{上声} , Yli ^{去声}	;	—, —, Yli ^{去声}	
iěŋ ^{平声} , iěŋ ^{上声} , iěŋ ^{去声} , iět ^{入声}	;	iěn ^{平声} , iěn ^{上声} , iěn ^{去声} , iět ^{入声}	
Yěŋ ^{平声} , Yěŋ ^{上声} , Yěŋ ^{去声} , Yět ^{入声}	;	yěn ^{平声} , yěn ^{上声} , yěn ^{去声} , yět ^{入声}	
iǎn ^{平声} , iǎn ^{上声} , iǎn ^{去声} , iǎt ^{入声}			
Yǎn ^{平声} , Yǎn ^{上声} , Yǎn ^{去声} , Yǎt ^{入声}			
iɛn ^{平声} , iɛn ^{上声} , iɛn ^{去声} , iɛt ^{入声}			
Yɛn ^{平声} , Yɛn ^{上声} , Yɛn ^{去声} , Yɛt ^{入声}			
ən ^{平声} , ən ^{上声} , ən ^{去声} , —			
aŋ ^{平声} , aŋ ^{上声} , aŋ ^{去声} , at ^{入声}			
uaŋ ^{平声} , uaŋ ^{上声} , uaŋ ^{去声} , uat ^{入声}			
aŋ ^{平声} , aŋ ^{上声} , aŋ ^{去声} , at ^{入声}			
uaŋ ^{平声} , uaŋ ^{上声} , uaŋ ^{去声} , uat ^{入声}			
eŋ ^{平声} , eŋ ^{上声} , eŋ ^{去声} , et ^{入声}			
ueŋ ^{平声} , —, ueŋ ^{去声} , uet ^{入声}			
eŋ ^{平声} , eŋ ^{上声} , eŋ ^{去声} , eŋ ^{入声}			
ueŋ ^{平声} , ueŋ ^{上声} , ueŋ ^{去声} , uet ^{入声}			

ieŋ ^{平声} , ieŋ ^{上声} , ieŋ ^{去声} , iet ^{入声} ;	ieŋ ^{平声} , ieŋ ^{上声} , ieŋ ^{去声} , iet ^{入声}
yeŋ ^{平声} , yeŋ ^{上声} , yeŋ ^{去声} , yet ^{入声} ;	yeŋ ^{平声} , yeŋ ^{上声} , yeŋ ^{去声} , yet ^{入声}
eu ^{平声} , eu ^{上声} , eu ^{去声} ;	
ieu ^{平声} , ieu ^{上声} , ieu ^{去声} ;	ieu ^{平声} , ieu ^{上声} , ieu ^{去声}
au ^{平声} , au ^{上声} , au ^{去声}	
au ^{平声} , au ^{上声} , au ^{去声}	
a ^{平声} , a ^{上声} , a ^{去声} ;	ia ^{平声} , —, —
ua ^{平声} , ua ^{上声} , ua ^{去声} ;	ya ^{平声} , —, —
a ^{平声} , a ^{上声} , a ^{去声} ;	ia ^{平声} , ia ^{上声} , ia ^{去声}
ua ^{平声} , ua ^{上声} , ua ^{去声}	
aŋ ^{平声} , aŋ ^{上声} , aŋ ^{去声} , ak ^{入声} ;	iaŋ ^{平声} , iaŋ ^{上声} , iaŋ ^{去声} , iak ^{入声}
uaŋ ^{平声} , uaŋ ^{上声} , uaŋ ^{去声} , uak ^{入声} ;	yaŋ ^{平声} , yaŋ ^{上声} , yaŋ ^{去声} , yak ^{入声}
aŋ ^{平声} , aŋ ^{上声} , aŋ ^{去声} , ak ^{入声} ;	iaŋ ^{平声} , iaŋ ^{上声} , iaŋ ^{去声} , iak ^{入声}
uaŋ ^{平声} , uaŋ ^{上声} , uaŋ ^{去声} , uak ^{入声} ;	yaŋ ^{平声} , yaŋ ^{上声} , yaŋ ^{去声} , yak ^{入声}
eŋ ^{平声} , eŋ ^{上声} , eŋ ^{去声} , ek ^{入声} ;	ieŋ ^{平声} , ieŋ ^{上声} , ieŋ ^{去声} , iek ^{入声}
ueŋ ^{平声} , —, ueŋ ^{去声} , uek ^{入声} ;	yeŋ ^{平声} , yeŋ ^{上声} , yeŋ ^{去声} , yek ^{入声}
eŋ ^{平声} , eŋ ^{上声} , eŋ ^{去声} , eŋ ^{入声}	
ueŋ ^{平声} , ueŋ ^{上声} , ueŋ ^{去声} , uek ^{入声}	
iǎŋ ^{平声} , —, iǎŋ ^{去声} , iǎk ^{入声} ,	
—, —, —, ɣǎk ^{入声}	
iěŋ ^{平声} , iěŋ ^{上声} , iěŋ ^{去声} , iěk ^{入声}	
əŋ ^{平声} , əŋ ^{上声} , əŋ ^{去声} , ək ^{入声}	
uəŋ ^{平声} , —, —, uək ^{入声}	
əu ^{平声} , əu ^{上声} , əu ^{去声} ;	iǒu ^{平声} , iǒu ^{上声} , iǒu ^{去声}
iěu ^{平声} , iěu ^{上声} , iěu ^{去声} ;	iěu ^{平声} , iěu ^{上声} , iěu ^{去声}
iěm ^{平声} , iěm ^{上声} , iěm ^{去声} , iěp ^{入声} ;	iěm ^{平声} , iěm ^{上声} , iěm ^{去声} , iěp ^{入声}
ɿm ^{平声} , ɿm ^{上声} , ɿm ^{去声} , ɿp ^{入声} ;	ɿɿm ^{平声} , ɿɿm ^{上声} , ɿɿm ^{去声} , ɿɿp ^{入声}
am ^{平声} , am ^{上声} , am ^{去声} , ap ^{入声} ;	iam ^{平声} , iam ^{上声} , iam ^{去声} , iap ^{入声}
iem ^{平声} , iem ^{上声} , iem ^{去声} , iep ^{入声} ;	iem ^{平声} , iem ^{上声} , iem ^{去声} , iep ^{入声}
em ^{平声} , em ^{上声} , em ^{去声} , ep ^{入声}	
əm ^{平声} , əm ^{上声} , əm ^{去声} , əp ^{入声}	
am ^{平声} , am ^{上声} , am ^{去声} , ap ^{入声}	

「一」の箇所は実例が存在しないことを意味する。右肩の声調名は違うが、同じ音声記号が横一列に並んでいるというものについては「四声相配」の関係にあるという。普通話で、第一声の「妈 mā」、第二声の「麻 má」、第三声の「马 mǎ」、第四声の「骂 mà」を一列に並べて、声調以外の部分 ma には違いが無いというのと同じようなものである。上記の処理では入声の場合は平上去声と比べて、例えば、-m:-p,-n:-t,-ŋ:-k のように韻尾が全く同じというふうになっていないが、-m と -p、-n と -t、-ŋ と -k はそれぞれ調音点が同じで、入声音節においては詰まった発音であるが故に、肺からの気流が鼻腔に抜ける余裕がなくなって、-m,-n,-ŋ が -p,-t,-k のようになってしまったというふうに考えることができるから、例えば平声IAM、上声IAM、去声IAM、入声IAM(=IAP) で四声相配する関係にあるというふうに見なしている。しかし以下では通行の表記に従って、入声韻尾は -p,-t,-k と記す。

3.1. 古代の声母の歴史的变化：チベット語における声調の誕生

音節を基本単位とする言語においては、言語変化は複合的に起きることが少なくない。音節構成要素のあるものの区別が失われると、別の要素に変化が生じて音節全体としての区別が保たれるといったようなことが起こるのである。今、それをチベット語を例に説明することにしよう。発音するときに声帯が振動するのが有声音（国語学の語では「濁音」）、振動しないのが無声音（同じく「清音」）である。有気音、無気音の違いは中国語を勉強した者には改めて説明するまでもないだろう。閉鎖音というのは上顎のどこかと下顎の唇もしくは舌のどこかをくっつけて発する音のことで、破裂音と呼ばれることもある。先の〈2.古代の発音の枠組み〉で言えば、唇音、舌音、牙音の次濁の列に並ぶもの以外と？（声門閉鎖音）である。古いチベット語では調音点を同じくする声母には無声無気音、無声有気音、有声閉鎖音、有声鼻音といった4種類の違いがあった。例えば、pa,p^ha,ba,ma；ta,t^ha,da,na；ka,k^ha,ga,ŋa といったふうに。以下の変遷を示す表では順に1，2，3，4と番号を振っている。四つを区別するという点は古代中国語と同じである。鼻音は有声音であるのが当たり前なので、特に有声鼻音というような言い方はしない。

両唇音声母の系列の場合だと、上に示したように p,p^h,b,m の4種があった。仮に母音 a との組み合わせで考えれば、pa,p^ha,ba,ma という4種の異なる音節が存在する。今、変化の段階を示すと、以下のようなになる。

	1	2	3	4
第一段階	pa,	p ^h a,	ba	ma
第二段階	ˉpa,	ˉp ^h a,	ˊba,	ˊma
第三段階	ˉpa,	ˉp ^h a,	ˊp ^h a,	ˊma

第二、第三段階の音声形式の左肩に付いているのは声の高低を模式的に示したものである。ˉは高い調子、ˊは低い調子を意味する。一般的に声帯の振動を伴う有声音は同じ調音点の無声音と比べて、始発高度が低い。これは生理的要因に基づく。第一段階でも前二者(1,2)に比べ後二者(3,4)の声の高低は低めであったろう。但しこの段階では声の高低の差は恐らくそれほど明瞭ではなかった。それがこの声の高低の違いが段々に顕著になって、第二段階のようになる。この段階で2と3は声母に違いがあり、声の高低の面でも違っている。しかし主要な違いはなお声母にあって、声の高低の違いは副次的なもので、違った高低で発音したとしても、声母の発音が正しければ、別の音節と認識されることは無かったであろう。それが次の第三段階になると、有声音は無声化して(b>p^h)、2と3は声母に違いが無くなり、専ら声の高低の違いによって、区別されることになった。こうなると、声の高低の違いによって異なる音節と認識されるようになる。声調の誕生である。

b>p^hという変化だけ見ると、bが元からあるp^h(こちらには変化は無かったと考えられる)に合流して、p,p^h,b,mの4種あった子音が、p,p^h,mの3種に減ってしまったということになる。しかし音節単位で見ると、チベット語は本来声調を持たない言語であるが、音節初頭の子音が無声音であったか有声音であったかを条件に声調が生まれた。無声音であった場合の音節には高い調子が、有声音であった場合の音節には低い調子が付与され、上に見るように、先の唇音の4種はˉpa,ˉp^ha,ˊp^ha,ˊmaというふうになり、以前はp^ha,baであった音節がˉp^ha,ˊp^haのようになって、声母の区別は失われたが、声調が生ずることで、今度は声調の違いによって区別されるようになったのである。だから声母の違いで区別されていた4種の音節(pa,p^ha,ba,ma)は、一部の声母の違いが失われるようになっても、同音になることなく、新たに生まれた声調によって、音節としての区別は保たれ続けているのである(ˉpa,ˉp^ha,ˊp^ha,ˊma)。ˊpa,ˉmaという音節が存在しないということに注意されたい。この変化はta,t^ha,da,na; ka,k^ha,ga,ŋaの系列についても同様である。なお有聲閉鎖音を今猶保って、声調を持たないチベット語方言も存在する。ここで取り上げたのはラサ方言の状況である。

ここに挙げたチベット語のような状況は中国語においても観察することができる。中国語にあっても有声音声母の無声化が声調の変化に深く関わっている。だから声調を云々するには声母の変化についても理解しておかねばならないのである。

3.2.古代の四声

以下、声母の変化を含めた形で、中国語の声調がどのように変化したか見て行くことにしよう。先に記したように、古代の「四声」と現代の普通話の「四声」は、声調の総数は同じであるが、四つのそれぞれが一對一に対応している訳ではない。古代の声調は平声、上声、去声、入声の4種それぞれが、声母が無声音のものであったか有声音のものであったかを条件に、二つに分裂し（これを「陰陽分裂」という）、それらが方言ごとに様々に異なった形で再統合されて、今の方言の声調体系が出来上がっている。だから方言によっては声調の数はまちまちで、広東語のように九つの声調のあるものや、蘇州方言のように七つのもの、上海語のように五つの声調のものがあつたりする。普通話では、それが四つの声調になったということで、中古音と同じ四つであっても、普通話において昔の声調体系の枠組みがそのまま保たれているというのではないのである。なお四つの声調がそれぞれ二つに分裂すれば合計八つであるのに、何で広東語はそれ以上の数になっているのかというと、二つに分裂した入声の一方がまた二つに分裂したものだから、一つ多めになっている（委細省略）。

元々声母が無声音であったものは無声音の特徴をそのまま保存して、「陰」の声調になった。これに対し有声音声母であったもののうち、鼻音、流音、半母音は有声音の特徴を保持したまま、そしてそれ以外の有声音は無声化して「陽」の声調になった。鼻音等の場合、これに合わない状況も見られるが（後述）、一先ずこのように説明しておく。平上去入の四つの声調のそれぞれが、陰と陽に分かれ、陰平声、陽平声、陰上声、陽上声、陰去声、陽去声、陰入声、陽入声という八つの声調体系になった。これらの声調名は「声」を省いて、「陰平」、「陽平」、「陰上」、「陽上」、「陰去」、「陽去」、「陰入」、「陽入」というふうにならざるに二音節に揃えて呼ばれることが多い。既に<3.1.古代の声母の歴史的变化：チベット語における声調の誕生>で指摘したように、一般に有声音を発音するときには無声音より始発高度が低い。これは生理的な要因によるもので、特定の言語に限ったことではない。そのため、古代中国語でもそもそもの初めは、陰調は高め、陽調は低めであつたろうと推測されている。もちろん声の上がり下がりといった特徴も他の子音や母音同様に、時代の流れの中で変わって行くものだから、現在の方言ではいつの頃か双方の高低が逆転し

てしまって、陰調の方が陽調より低くなっているなどというような場合も当然存在する。例えば広東語。

鼻音、流音、半母音は無声音：有声音という二分法で考えれば、有声音に属することは言を俟たないのであるが、「陰陽分裂」においては、時に他の有声音とは行動を別にして、無声音と同じように振舞うことがある。だからそれ以外の有声閉鎖音とは分けて考えた方が良いというところがある。古代の声母の大雑把な分類でも、無声無気音を「(全)清」、無声有気音を「次清」、鼻音、流音を除く有声音を「(全)濁」、鼻音、流音を「次濁」といったふうと呼んで、四つに分けることが行われている。先の<2.古代の発音の枠組みの切韻の声母>参照。ここにもう一度示すことにする。

古代の清濁	音声学用語	該当声母 (推定音価で挙げる)
(全)清	: 無声無気音	p t k ts s tʃ ʃ tɕ ɕ h ?
次清	: 無声有気音	p ^h t ^h k ^h ts ^h tʃ ^h tɕ ^h
(全)濁	: 有声閉鎖、破擦、摩擦音	b d ɖ g dz z dʒ ʒ ʒ̥ ʒ̥̥ f̥
次濁 (~清濁)	: 鼻音、流音、半母音	m n ŋ ɲ j ɲ l

「(全)清」は「清」と呼ぶ場合もあれば、「全清」と呼ぶ場合もあるので、このように記した。同様に、「(全)濁」もただ「濁」という場合もあれば、「全濁」と言う場合もある。「次濁」はまた「清濁」とも呼ばれる。以下では、「全清」、「次清」、「全濁」、「次濁」を用いることにし、「全清」、「次清」の総称(今風に言えば、即ち「無声音」として「清」を、「全濁」、「次濁」の総称(今風に言えば、即ち「有声音」として「濁」を、そして「清」と「濁」の総称として「清濁」を用いるというふう)に、使い分けることにしたい。摩擦音の清、濁もそれぞれ全清、全濁と表記しておく。

通常、調音点を同じくする子音について言えば、全清、次清、全濁、次濁の順に並べると、p,p^h,b,m; t,t^h,d,n; k,k^h,g,ŋ というふうになっており、これらの例で次濁に挙げられているのは鼻音である。但し鼻音は m,n,ŋ,ɲ しかないから、全ての系列で次濁があるという訳ではなく、ts,t^hs,s,...;tʃ,tʃ^h,ʃ,...;tɕ,tɕ^h,ɕ,...の系列は次濁を欠く。そしてɲ (これは後に変化して、普通話では拼音で r と表記されるものになった)と、同じく次濁に属する l の二つは他の声母とは別格として取り分け、末尾に並べるのが、伝統的な音韻学、特に「韻図」と呼ばれる中国版五十音図に見られる扱い方である。説明が前後してしまったが、具体的状況については先の<2.古代の発音の枠

組みの切韻の声母>を参照されたい。「陰陽分裂」において、無声無気音（「全清」）と無声有気音（「次清」）が異なる振る舞いをするのはほとんど無いので、「全清」と「次清」の二者を分ける必要は実際には無いと言って良からう。だから両者を合わせて説明する場合には今風に無声音と言っても構わないのだが、有声音の方は鼻音、流音、半母音のグループとこれらを除いた有声音で振舞いが異なることがあるので、分けておく必要がある。これらを今風の名称でいうと面倒なので、全て伝統的名称を用いることにしたい。

3.3.1.平声の場合

普通話では『切韻』の声調がどのようになっているかという、先ず平声だが、無声音声母（清）の場合には「陰平（声）」、有声音声母（濁）の場合には「陽平（声）」となった。「陰平」は今、普通話で第一声と呼ばれている。そして「陽平」は第二声と呼ばれている。この分裂で注意すべき点は全濁声母が無声有気音に変化したことである。以下の例を参照されたい。

例字	切韻推定音	調類	声母	普通話	
巴	pa	平声	全清	bā[pa ⁵⁵]	第一声（陰平）
葩	p ^h a	平声	次清	pā[p ^h a ⁵⁵]	第一声（陰平）
爬	ba	平声	全濁	pá[p ^h a ²⁴]	第二声（陽平）
麻	ma	平声	次濁	má[ma ²⁴]	第二声（陽平）
耽	tɿm	平声	全清	dān[tan ⁵⁵]	第一声（陰平）
貪	t ^h ɿm	平声	次清	tān[t ^h an ⁵⁵]	第一声（陰平）
談	dɿm	平声	全濁	tán[t ^h an ²⁴]	第二声（陽平）
男	nɿm	平声	次濁	nán[nan ²⁴]	第二声（陽平）
遭	tsau	平声	全清	zāo[tsau ⁵⁵]	第一声（陰平）
操	ts ^h au	平声	次清	cāo[ts ^h au ⁵⁵]	第一声（陰平）
曹	dzau	平声	全濁	cáo[ts ^h au ²⁴]	第二声（陽平）
獠	nau	平声	次濁	náo[nau ²⁴]	第二声（陽平）
勞	lau	平声	次濁	láo[lau ²⁴]	第二声（陽平）

次濁は有声音の性質を保ちながら、陽平となり、全濁は無声有気音に変化して、陽平となっている。この対応関係を見ると、全清の系列、つまり無声無気音の系列は陰平しか無く、次濁の系列は陽平しか無い。全濁は無声有気音となって、次清と

合流してしまったが、全濁の場合は陽平に、次清の場合は陰平になったから、声母の無声、有声で区別されていたものが、声調の違いで区別されるようになったのである。今、上の例に即して言えば、全清の「巴pa^{平声}」は bā[pa^{陰平}] に、次清の「葩p^ha^{平声}」は pā[p^ha^{陰平}] に、全濁の「爬^{平声}ba」は pá[p^ha^{陽平}] に、次濁の「麻ma^{平声}」は má[ma^{陽平}] になった。「葩p^ha^{平声}」と「爬ba^{平声}」は本来は声母の音価の違いで区別されていたが、普通話では pā[p^ha^{陰平}] と pá[p^ha^{陽平}] になっていて、声調で区別されるようになっている。無声無気音声母 b[p] で始まる場合には第一声しか無く、鼻音 m[m] で始まる場合には第二声しか無いが、p[p^h] で始まるものには第一声と第二声の両方のケースがある。先のチベット語の状況と同じであることが理解できたであろうか？チベット語の場合には第一段階では声調は無かったが、中国語の場合は第一段階で既に様に平声という声調が付いているものと思えば良い。

普通話では全濁声母は無声化して、次清声母と区別が無くなって見分けがつかなくなっているが、上の変化状況を頭に入れれば、第二声で有気音のものがかつての全濁声母であったことが分かる。但しややこしいのだが、古代にあって全濁声母平声であれば、普通話では一律、第二声で有気音となるとは言えるが、逆に普通話において第二声で有気音であれば全て古代の全濁声母平声であるとは必ずしも言えない。何故かということについては後述（＜3.3.4.6.体系的な空き間の利用＞）。

3.3.2.去声の場合

では他の声調の場合はどうであったかということ、「次濁」の振る舞いが違っていたり、全濁声母の変化の仕方が違っていたりすることがあるので、ややこしい。順序が前後してしまうが、そのうち去声が最も簡単なので、去声を先に説明することにしよう。去声は一旦は他の声調同様に、声母の無声：有声を条件として陰去（声）、陽去（声）に分裂したのであろうが、普通話の先祖に当たる方言では恐らく、両者は高さが僅かに違うだけで、上がり下がりのパターンは同じであった。この高さの違いが拡大されることなく、元に戻って、陰陽の対立は解消されてしまった。全濁声母は平声の場合と違って、去声においては無声無気音に変わったから、全清声母と同じになる。＜3.1.古代の声母の歴史的変化：チベット語における声調の誕生＞で示したチベット語の3段階モデルを少し書き換えて、以下のように示すことができる。

	1	2	3	4	
第一段階	pa,	p ^h a,	ba,	ma	
第二段階	ˉpa,	ˉp ^h a,	ˊpa,	ˊma	
第三段階	ˉpa,	ˉp ^h a,	ˉpa,	ˉma	つまり pa, p ^h a, pa, ma (1=3)

第二段階（音声的には両者に声の高低の違いがある状態）からそれ以上先に進まず、全ての音節が唯一つの去声という声調の高低パターンをとるような状態、つまりチベット語の例で言えば、第一段階（声調を区別しない段階）のような状態に戻ってしまった。恐らく微細な高さの違いだけに止まり、調型（上がり下がり）には違いは無かったのであろう。しかし3の系列の声母の無声化（b>p）は起こったから、第三段階は先の平声の場合とは異なり、上のようになる。高さの表示は ˊpa, ˊp^ha, ˊpa, ˊma としても良い。但し全てが陰去もしくは陽去で統一されたということの意味するのではない。要は四つの全てがただ一つの同じ調型をとるということで、そうなれば対立する調型がないのだから、声調とは認められない。声調が一つしかない体系など有り得ないのである。つまりチベット語モデルに即して考えれば、声調無しということになる。中国語の場合は第一段階で全てに去声という声調が備わっていて、それが二分されそうになって、また元に戻ったということで、全体が元の一つの去声という状況に戻ってしまったということである。

この場合には全濁声母の無声化によって声母の違いが4種類から3種類に減ってしまったが、結局、声調の分裂はなかったから、1（全清）と3（全濁）が同音になる。普通話の基である北京語はこのような状況をそのまま引き継いでいる。上の例の「霸」と「耙」、「豹」と「砲」、「到」と「盜」がそれに当たる。cf.の部分は後述。

例字	推定音	声調	清濁	普通話
霸	pa	去声	全清	bà[pa ⁵¹]
怕	p ^h a	去声	次清	pà[p ^h a ⁵¹]
耙	ba	去声	全濁	bà[pa ⁵¹] = 全清「霸」
罵	ma	去声	次濁	mà[ma ⁵¹]
豹	pau	去声	全清	bào[tau ⁵¹]
砲	p ^h au	去声	次清	pào[p ^h au ⁵¹]
砲	bau	去声	全濁	bào[tau ⁵¹] = 全清「豹」

貌	mau	去声	次濁	mào[mau ⁵¹]	
cf. 鮑	bau	上声	全濁	bào[tau ⁵¹]	=全清「豹」(次節で説明)
到	tau	去声	全清	dào[tau ⁵¹]	
套	t ^h au	去声	次清	tào[t ^h au ⁵¹]	
盜	dau	去声	全濁	dào[tau ⁵¹]	=全清「到」
澇	lau	去声	次濁	lào[lau ⁵¹]	(nの例が無いのでlで代用)
cf. 道	dau	上声	全濁	dào[tau ⁵¹]	=全清「到」(次節で説明)

声調に関して言えば、古代の去声は現代北京語の成立に至る変化の中で陰去、陽去に分かれなかったから、このような去声の枠組みを普通話と対比すると「一對多」という関係ではなく、そのままそっくり第四声となる。つまり、『切韻』の去声は全て普通話の第四声に対応すると言って良い。但し、普通話の第四声が全て『切韻』の去声に由来するとは言えない。その理由は次節で説明する。

3.3.3.上声の場合

それでは次に上声を見てみることにしよう。上声は陰陽分裂を生じて、「陰上(声)」、「陽上(声)」に別れたのであるが、平声の場合とは異なり、次濁が清(つまり全清と次清)と同じ振る舞いをして、陰上となった。そして全濁だけの陽上は去声に合流してしまったのである。だから『切韻』の上声は普通話では陰上だけが独立した調類を保っていて、それが第三声となっている。陽上は去声と合流したので、普通話では第四声となっている。上声の全濁が去声に合流するというのは他の多くの方言にも共通することで、このような方言においては独立した声調としての上声と言えば陰上しか無い。だからこれをただ「上声」と呼び、ことさら「陰」の字をつけないことが多い。その場合、「陰平」、「陽平」、「上声」、「去声」というふうに、二音節で揃えているのが一般的である。普通話の第一声、第二声、第三声、第四声もこのような伝統的な呼び方に従えば、順に「陰平」、「陽平」、「上声」、「去声」ということになる。

なお「上声」を shǎngshēng というふうに発音するのは、声調名として用いられた「上」という字が本来、上声の声調を持つ字であったのに、声母が全濁なので、その声調が陽上声となって去声に合流、今では去声の声調を取ることになってしまい (zian^{上声}>ɣan^{陽上声}>ɣan^{去声})、「上声」という声調名を表す字としてふさわしくなくなってしまったために、わざと陰上声の声調に読み変えて、上声の代表字であることを示すようにしたものである。つまり「上」の shǎng という読みは声調名を表すた

めに造られた人工的字音であって、それ以外では用いられることはない。ときに「上声」を「賞声」と表記する例を見かけるが、これは shǎngshēng という声調名の読みに対する当て字。

例字	推定音	声調	清濁	普通話	
補	po	上声	全清	bū[pu ²¹⁴]	第三声
普	p ^h o	上声	次清	pǔ[p ^h u ²¹⁴]	第三声
部	bo	上声	全濁	bù[pu ⁵¹]	第四声 = 去声「布」、「歩」
cf. 布	po	去声	全清	bù[pu ⁵¹]	
cf. 歩	bo	去声	全濁	bù[pu ⁵¹]	
姥	mo	上声	次濁	mǔ[mu ²¹⁴]	
党	taŋ	上声	全清	dǎng[taŋ ²¹⁴]	第三声
躺	t ^h aŋ	上声	次清	tǎng[t ^h aŋ ²¹⁴]	第三声
蕩	daŋ	上声	全濁	dàng[taŋ ⁵¹]	第四声 = 去声「擋」、「宕」
cf. 擋	taŋ	去声	全清	dàng[taŋ ⁵¹]	
cf. 宕	daŋ	去声	全濁	dàng[taŋ ⁵¹]	
曩	naŋ	上声	次濁	nǎng[naŋ ²¹⁴]	第三声
宰	tsai	上声	全清	zǎi[tsai ²¹⁴]	第三声
採	ts ^h ai	上声	次清	cǎi[ts ^h ai ²¹⁴]	第三声
在	dzai	上声	全濁	zài[tsai ⁵¹]	第四声 = 去声「再」、「載運也」
cf. 再	tsai	去声	全清	zài[tsai ⁵¹]	
cf. 載運也	dzai	去声	全濁	zài[tsai ⁵¹]	
乃	nai	上声	次濁	nǎi[nai ²¹⁴]	第三声

文献資料から伺えるところでは、全濁声母の上声（以下、これを「全濁上声」というような呼び方をする。他も同じ）は先ず全濁去声と合流し、その後で去声の陰陽が再び統一されたようである。もちろん全ての方言がこのようであったということではなく、陰去、陽去を分けている現代方言も無い訳ではない。これまで見てきたとおり、四声相配の関係にある韻の全濁上声、全清去声、全濁去声は同音となってしまう。上掲例の部＝布＝歩；蕩＝擋＝宕；在＝再＝載運也。大量の同音字が生まれて、コミュニケーションに支障を来すことになったのではないかという素朴な疑問が湧くが、これについては、全濁上声の字には常用語彙に属するものが多いのだが、元々、全体でその数は余り多くはなく、実際にこの合流で同音となるケース

はそれ程多くはなかったと考えられる。同音になるにしても一方がほとんど用いられることのないような字であれば、合流しても大した問題にはならない。そもそもコミュニケーションに支障を来たすような変化は普通は起こらないものである。

3.3.4. 入声の場合

3.3.4.1 韻尾の消失

入声は最もややこしい。「清」、「全濁」、「次濁」で声調変化の有様が違っただけでなく、入声韻尾 (-p, -t, -k) の消失も絡んでいるからである。先ずはこの後者の問題から説明していくことにしよう。入声は南方の方言では今でも保たれている。特に広東語は韻尾に関しては『切韻』時代の姿を最も良く留めていると言えるだろう。乱暴な言い方をすれば、中国語の方言は南に行くほど古い特徴が良く残っており、北へ行くほど変化の度合いが激しく、昔の特徴が失われている。入声についてもそれが言え、珠江デルタ（広東語地域）を出て、少し北の長江下流地域（上海、蘇州語地域）に行くと、韻尾 -p, -t, -k は合流して -ʔ となっているが、詰まった調子は保たれている。更に北に行くと -ʔ も無くなって、詰まった調子でもない。こうなると元々入声でなかった字との区別がつかなくなってしまう。例えば普通話で、「他 tā」と「塌 tā」、「古 gǔ」と「骨 gǔ」、「狡 jiǎo」と「脚 jiǎo」、「周 zhōu」と「粥 zhōu」は同音であるが、南の方言でははっきりとした違いがある。以下の方言の発音を参照されたい。A としたのが非入声字、B が入声字である

普通話	済南	揚州	蘇州	梅県	広州
A 他 tā[t ^h a ⁵⁵]	t ^h a ²¹³ (陰平)	t ^h a ³¹ (陰平)	t ^h a ⁴⁴ (陰平)	t ^h a ⁴⁴ (陰平)	t ^h a ⁵⁵ (陰平)
B 塌 tā[[t ^h a ⁵⁵]	t ^h a ²¹³ (陰平)	t ^h a ^{ʔ5} (入声)	t ^h a ^{ʔ4} (陰入)	t ^h a ^{ʔ2} (陰入)	t ^h a ^{ʔ33} (中陰入)
A 古 gǔ [ku ²¹⁴]	ku ⁵⁵ (上声)	ku ⁴³⁴ (上声)	kəu ⁴¹ (上声)	ku ⁴³⁴ (上声)	ku ³⁵ (陰上)
B 骨 gǔ [ku ²¹⁴]	ku ²¹³ (陰平)	kuə ^{ʔ5} (入声)	kuv ^{ʔ4} (陰入)	ku ^{ʔ2} (陰入)	kwat ⁵⁵ (上陰入)
A 狡 jiǎo[tɕiau ²¹⁴]	tɕio ⁵⁵ (上声)	tɕio ⁴³⁴ (上声)	tɕiæ ⁴¹ (上声)	kau ⁴³⁴ (上声)	ka:u ³⁵ (陰上)
B 脚 jiǎo[tɕiau ²¹⁴]	tɕey ²¹³ (陰平)	tɕio ^{ʔ5} (入声)	tɕio ^{ʔ4} (陰入)	kiok ² (陰入)	kæk ³³ (中陰入)
A 周 zhōu[tʂou ⁵⁵]	tʂou ²¹³ (陰平)	tʂvu ³¹ (陰平)	tsy ⁴⁴ (陰平)	tsu ⁴⁴ (陰平)	tʃau ⁵⁵ (陰平)
B 粥 zhōu[tʂou ⁵⁵]	tʂou ²¹³ (陰平)	tso ^{ʔ5} (入声)	tso ^{ʔ4} (陰入)	tsuk ² (陰入)	tʃuk ⁵⁵ (上陰入)

北京に近い済南では普通話と大差ない状況であるが、長江下流域の揚州、蘇州、広東の梅県、広州では明瞭な違いがあり、入声（タイプ B）には子音韻尾が残っていることが分かる。実は我々日本人にとってはこのような違いは漢字の音読みを利

用すれば、簡単に理解できる。いわゆるフ、ク、ツ、チ、キで終わっている読みのものが入声である。ツ、チで終わるものは『切韻』で -t で終わっていたもの（例：「骨」コツ、中古音kuət；「八」ハチ、中古音pet）、ク、キで終わっているものは『切韻』で -k で終わっていたもの（例：「楽」ラク、中古音lak；「滴」テキ、中古音tek）である。フは -p で終わっていたものであるが、これは旧カナ遣いでの話で、新カナ遣いでは後の日本語のフ>ウ（アフ>アウ>オー；エフ>イェウ>ヨー；イフ>イウ>ユー）の変化を反映していて、今の我々には見分けがつき難くなっている。旧カナ遣いの音読みを辞書で調べるのが一番確実であるが、単独ではオー、ヨー、ユーのような読みでも、後に別の字が来たときに詰まった読みがなされる例があるものは、フ-p からきていると考えて良い。例えば、「甲」はコーだが、「甲冑」の時にはカッチュウとなる。このコーはカフが変わったものである。「十」はジュー（<ジフ）だが、「十回」はジッカイ（ジュッカイは誤り）、「塔」はトー（<タフ）だが、「塔柱」はタッチュウ、「合」はゴー（<ガフ）だが、「合算」はガッサン等々。但し、他の字と組み合わせさつたらいつも詰まった読みになるという訳ではないので、不幸にして詰まって読む例が見つけれないといった場合には入声字であることに気づかない。例えば、「甲乙」^{こうおつ}、「十八」^{じゅうはち}、「谷計」^{つうけい}などは詰まった読みではない。高（コー<カウ）、鋼（コー<カウ）、獸（ジュー<ジウ）、「従」（ジュー<ジウ）、到（トー<タウ）、「冬」（トー<トウ）、「豪」（ゴー<ガウ）などこれらと現在の読みが同じでも、入声由来でないものは詰まった読みとなることは全く無い。

3.3.4.2 舒声への合流

各方言の入声がどうなっているのかを見てみると、北方方言では子音韻尾を失ってしまっ、詰まった調子という特徴も無くなって、平上去声のいずれかに合流している。先に平声とそれ以外の声調の二分法があることを紹介した（「平声」とそれ以外の上、去、入声の三つを纏めて「仄声」とする分け方）。「入声」とそれ以外という分け方もある。平、上、去声の三つを纏めて「舒声」とするものである。その用語を用いれば、入声は舒声に合流する、派入するといった言い方になる。その合流のあり方は各方言で様々であるが、こと北京語に関して言うと、全濁入声は陽平に、次濁入声は去声に合流する。そして清入（声）はというと、普通話の基礎となった北京語ではまるでランダムであるかのように個々の字が様々な声調に合流している。北方のどこでもこのようだという訳ではなく、ある地域ではまとめて陰平に、ある地域ではまとめて上声にといった変わり方をしている。例えば、上掲例の済南では入声が全て陰平として現れているのに気づくだろう。ここに挙げた入声

字は全て清入である。濟南方言では清入は規則的に陰平になっているのである。

以下、韻母を同じくするもの毎に、調音点の同じ声母について、全清、次清、全濁、次濁の順に並べ、各方言でどのような声調になっているか一覧するが、次濁に鼻音が無いとか、適字を欠くといった場合には、調音点の近い鼻音声母もしくは流音声母のものを代わりに挙げる。「一」としてあるのは該当字が無いか、あってもほとんど使われない字しか無いことを示す。北京語の声調についてのみ全濁入声字由来のものは○で囲み、次濁入声字由来のものは□で囲った。参考までに入声を持たない各方言において入声字がどのような声調になっているかも示す。複数のデータがあり、相互に異同がある場合、規則的であるものを採用し、対応関係が見え易いように細工する。声調は各方言で総数が一致しないことがあり、アラビア数字で示すと、同じ数字が普通話＝北京語とは異なる調類を指す場合が出てくる。そのため旧来の「陰平」、「陽平」などの名称を用いた。既に説明済みであるが、北京語は第一声：陰平、第二声：陽平、第三声：(陰)上声、第四声：去声である。昌黎方言のみは去声に陰陽の別があるので、「陰去(声)」、「陽去(声)」という他の方言に無い声調名が現れている。一字に複数の音がある場合には、代表としてそのうちの一つのみを挙げ、後は注で示すようにした。昌黎は河北省東北部、榮成は山東半島の東端に位置する。これらの各地点のデータは末尾の一覧に挙げる。複数の文献がある場合は主として最初に挙げるものに依拠している。

例	切韻音	普通話	声調						
			北京	昌黎	榮成	洛陽	蘭州	重慶	
全清	卓	tɔuk	zhuō[tʂuo ⁵⁵]	1	陽平	上声 ₅	陰平	?	陽平
	桌	tɔuk	zhuō[tʂuo ⁵⁵]	1	陰平	上声	陰平	去声	陽平
	琢	tɔuk	zhuó[tʂuo ²⁴]	2	陽平	陽平	陰平	?	?
	啄	tɔuk	zhuó[tʂuo ²⁴]	2	陰平	陽平 ₆	陰平 ₁₅	?	?
次清	戳	tʰɔuk	chuō[tʂʰuo ⁵⁵]	1	上声	上声	陰平 ₁₆	去声	陽平
全濁	濁	ɖɔuk	zhuó[tʂuo ²⁴]	1	?	陽平	陽平	陽平	陽平 ₂₇
次濁	擲	nɔuk	nuò[nuo ⁵¹]	□	?	?	陰平	?	?
全清	博	pak	bó[po ²⁴]	2	陽平	陽平	陰平	陽平 ₂₃	陽平
次清	粕	pʰak	pò[pʰo ⁵¹]	4	?	?	?	?	?
全濁	薄	bak	bó[po ²⁴], báo[po ²⁴]	②	陽平	去声	陽平	陽平	陽平
次濁	莫	mak	mò[mɔ ⁵¹]	□	陰去	上声	陰平	去声	陽平

全清	作	tsak	zuò[tsuo ⁵¹]	4	陰平	上声 ₇	陰平	去声 ₂₄	陽平
次清	錯	ts ^h ak	cuò[ts ^h uo ⁵¹]	4	陰去	去声	陰平 ₁₇	去声	去声
全濁	昨	dzak	zuó[tsuo ²⁴]	②	陽平 ₁	上声	上声	陽平	陽平
次濁	諾	nak	nuò[nuo ⁵¹]	ㄣ	?	上声	上声	?	去声
次濁	落	lak	luò[luo ⁵¹]	ㄣ	陰去	上声 ₈	陰平 ₁₈	去声	陽平 ₂₈
全清	伯	pak	bó[po ²⁴],bǎi[pai ²¹⁴]	2/3	陽平	上声	陰平	去声	陽平
	百	pak	bǎi[pai ²¹⁴]	3	上声	上声	陰平	去声	陽平
次清	拍	p ^h ak	pāi[p ^h ai ⁵⁵]	1	陰平	陰平	陰平	去声	陽平
	魄	p ^h ak	pò[p ^h o ⁵¹]	4	陽去	上声	陰平 ₁₉	去声	?
全濁	白	bak	bái[pai ²⁴]	②	陽平	去声	陽平	陽平	陽平
	帛	bak	bó[po ²⁴]	②	陽平	陽平	陽平	?	陽平
次濁	陌	mak	mò[mo ⁵¹]	ㄣ	?	上声	陰平	?	陽平
全清	的	tek	dí[ti ²⁴],dì[ti ⁵¹]	2/4	上声 ₂	上声	陰平 ₂₀	去声 ₂₅	?
全清	滴	tek	tī[ti ⁵⁵]	1	陰平	上声	陰平	去声	陽平
次清	剔	t ^h ek	tī[t ^h i ⁵⁵]	1	陰平	上声 ₉	陰平	去声	?
次清	踢	t ^h ek	tī[t ^h i ⁵⁵]	1	上声	上声	陰平	去声	陽平
全濁	笛	dek	dí[ti ²⁴]	②	陽平	陽平	陽平	陽平	?
全濁	敵	dek	dí[ti ²⁴]	②	陽平	上声	陽平	陽平	陽平
次濁	溺	nek	nì[ni ⁵¹]	ㄣ	陽去	?	去声	去声	?
全清	質	tɕiət	zhì[tɕi ⁵¹]	4	上声	上声	陰平	去声	陽平
全清	失	ɕiət	shī[ɕi ⁵⁵]	1	上声	上声	陰平	去声	陽平
次清	叱	tɕ ^h iət	chì[tɕ ^h i ⁵¹]	4	?	?	?	?	?
全濁	寔	ziət	shí[ɕi ²⁴]	②	陽平	陽平	陽平	陽平	陽平
次濁	日	niət	rì[ɕi ⁵¹]	ㄣ	陽去	上声	陰平	去声	陽平
全清	厥	kʷɛt	jué[tey ²⁴]	2	?	去声	陰平 ₂₁	?	?
全清	蕨	kʷɛt	jué[tey ²⁴]	2	?	去声	?	陽平	?
全清	蹶	kʷɛt	jué[tey ²⁴]	2	上声	上声 ₁₀	?	?	?
次清	闕	k ^h ʷɛt	quē[tɕ ^h yo ⁵⁵],què[tɕ ^h yo ⁵¹]	1/4	陽去	?	?	去声	?

全濁 掘	ɣʏʌt	jué[teyə ²⁴]	②	陽平	陰平	陰平	陽平	陽平
次濁 月	ɣʏʌt	yuè[yə ⁵¹]	㊦	陽去	上声 ¹¹	陰平	去声	陽平
全清 急	kɿɐ̃p	jí[teɿ ²⁴]	2	陽平 ³	上声	陽平	陽平	陽平
次清 泣	k ^h ɿɐ̃p	qí[te ^h ɿ ⁵¹]	4	?	陰平	陰平 ²²	去声	?
全濁 及	ɣɿɐ̃p	jí[teɿ ²⁴]	②	陽平	上声 ¹²	陰平	去声	陽平
次濁 立	lɿɐ̃p	lì[lɿ ⁵¹]	㊦	陽去	上声	陰平	去声	陽平
全清 答	tʌp	dā[ta ⁵⁵], dá[ta ²⁴]	1/2	陽平 ⁴	上声 ¹³	陰平	去声	陽平
次清 踏	t ^h ʌp	tà[t ^h a ⁵¹]	4	?	上声	陰平	去声 ²⁶	陽平
全濁 沓	dʌp	dá[ta ²⁴]	②	?	陽平	陽平	陽平	?
次濁 納	nʌp	nà[na ⁵¹]	㊦	陽去	上声 ¹⁴	陰平	去声	陽平

注：

- 1 他に陽去の音もあり
- 2 他に陽去の音もあり
- 3 他に陽去の音もあり
- 4 他に陰平の音もあり
- 5 《王》に拠る。《張》陽平
- 6 《王》は ts^hɔ(上声)、t^hɔ(陰平)。どちらも声母が不規則
- 7 陰平、去声の音もあり。《王》は陰平、去声の二音のみ
- 8 去声の音もあり。《王》は去声のみ
- 9 《王》は陰平
- 10 《王》は陰平
- 11 他に陽平もあり。《王》は上声のみ
- 12 《張》は陽平
- 13 《王》は陰平もあり
- 14 他に陽平もあり。《王》は陽平のみ
- 15 《志》に拠る。《賀》は陽平
- 16 《志》動詞の場合は陽平とする。《賀》は陰平のみ
- 17 《志》に拠る。別に去声あり。《賀》は去声のみ
- 18 《志》は別に la(去声)を挙げる
- 19 《志》に拠る。《賀》は無し

- 20《志》は上声
- 21《志》に拠る。《賀》は無し
- 22《志》に拠る。《賀》は去声
- 23《高》は上声と去声の二音
- 24《高》別に陰平あり
- 25《高》は別に陽平あり。《市》は陽平のみ
- 26《高》は別に陽平あり。《市》は陽平のみ
- 27《四》に拠る。《翟》は無し
- 28《四》に拠る。《翟》は去声

各方言毎に独自の規則性が見られる。例外についてはもしそれが北京語と同じ調類となっているのであれば、概ね普通話＝北京語からの借用の結果と考えて、考察の対象から外して良からう。重慶方言では？の部分は無視するとして、「錯」が去声になっているのを除くと、声母が何であれ、陽平に合流している。蘭州方言は全濁入声が陽平になるのを除くと、他は声母の如何に拘らず去声になっているように見える。この他の方言は例外が少なくないので傾向を見出すのは容易ではないが、多くの北方方言で全濁入声が陽平になっていることは見てとれる。そして洛陽方言で次濁入声が多く陰平になっているのを除くと、それ以外の方言では次濁入声は去声になっていることが多い。これらに比べると、清入声の合流状況は、榮成方言で上声となっているものが多い、洛陽方言では陰平になっているものが多いというような傾向が見られるが、そうでないものも多く、まるで字ごとに違っているというような印象を与える。方言によっては、入声韻尾の消失、平上去声への合流は全ての入声字に同時に起こったというのではなく、声母の清、全濁、次濁を条件に時期的にズレて起こったことが関係していると考えられる。恐らく、この三つの声母の類のうちで全濁の入声韻尾消失が最も早く起き、続いて次濁の韻尾も消失したが、清入声の韻尾は比較の後まで残り、詰まって不安定な調子で発音されていたのであろう。実際に清入声のものだけが入声として残り、全濁入声は陽平に、次濁入声は去声に合流しているという現代方言が存在する。勿論、上掲例で分かるとおり（特に重慶方言）、入声を失った全ての方言についてこのように言えるというのではない。具体的には北京語においてこうであったと言うに過ぎない。

清入声は完全舒声化に至る過渡的段階において、詰まって不安定な調子で発音されていたが故に、後ろにどのような声調が来るかによって、様々な変調調値を取っていたと思われる。＜1.普通話（＝北京語）の声調＞の表で分かる通り、現代北京

語では第三声と第四声は後ろにどのような声調の字が来るかによって、単独で発音された場合と異なる調値を取っているが、完全舒声化に至る前の入声はこれ以上に多様な変調状況を呈していたことであろう。それが代表的な語彙、つまり使用頻度の最も高い語彙に現れる調値がその入声字の調値と見なされるようになって、その他の場合でも右倣え式に代表的な語彙に現れる調値で発音されるようになり、字ごとに声調が定まって行った結果が、現在の北京方言そして普通話の無秩序な派入状況なのであろう。例えば普通話では「塌」は tā、「塔」は tā、「榻」は tà と、それぞれ異なった声調であるが、『切韻』では全くの同音である。「剥 bō」と「駁 bó」にしても『切韻』で同音であったものである。

代表的な語彙の使用頻度には及ばないが、やはりよく使われる語彙であるが故に、そこでは代表的な語彙に現れる調値に取り替えられることなく、その語本来の変調調値が保存されているといったものもかつては少なくなかったのであろうが、完全舒声化で代表的な語彙に現れる調値への取替えが進み、やがては引き潮の後に点在する水溜りのように、使用頻度の最も高い個別の語彙に現れる場合にのみ僅かに変調調値が保存されているといった状態へと移行する。「答应」の「答」は，dā だが「问答」の「答」は dá と発音する。また「的确」の「的」は dí だが、「目的」の「的」は dì と発音する。これはまだ一つの声調に絞られる二段階ほど前の状況で、やがては最もよく使われる語彙に現れる声調がその字の声調であると認識されるようになって、他の場合においても一律にその声調で発音されることになるのである。「煞」は「煞尾：締めくくり」のときは shā と発音するが、「煞白：顔面蒼白になる」という語においては shà と発音する。ここでの「煞」は「非常に」という意味で、かつてはこの意味の場合には shā と発音したが、この shā はとうの昔に淘汰されてしまった。こういった状況が、もし更に進んで、「煞」は一般に shā と発音されるが、「煞白」のときだけは shà と発音されることもあると言うようになれば、恐らくそれが完全舒声化寸前の状況であろう。これに類したものに、「结」がある。「结实」の「结」は jiē、今では用いられなくなったが、かつて「打结子：服の縫い目」は dā jiēzi と発音した。これ以外の場合には普通 jié と発音する。また「骨头」の「骨」は gú と発音するが、「骨」は通常は gǔ と発音する、といった例がある。やがて最後にはこのような個別の特殊例さえも姿を消し、通常の発音とされるものだけが残る。以下に示す **A の状態** から **B の状態** への移行である。上下で一対づつ挙げたうちの各 B は対を成す各 A と『切韻』の段階では同音であったものだが、現代北京方言ではただ一つの読みしかない。

例字	切韻音	北京音			
		第一声	第二声	第三声	第四声
A 答	tap	dā[ta ⁵⁵]	dá[ta ²⁴]		
B 搭	tap	dā[ta ⁵⁵]			
A 的	tek		dí[tí ²⁴]		dì[tí ⁵¹]
B 嫡	tek		dí[tí ²⁴]		
A 煞	ʂet	shā[ʂa ⁵⁵]		(shā[ʂa ²¹⁴])	shà[ʂa ⁵¹]
B 杀	ʂet	shā[ʂa ⁵⁵]			
A 結	kuet	jiē[tɕiə ¹¹]	jié[tɕiə ²⁴]	(jiě[tɕiə ²¹⁴])	
B 潔	kuet		jié[tɕiə ²⁴]		
A 骨	kuət		gú[ku ²⁴]	gǔ[ku ²¹⁴]	
B 汨	kuət			gǔ[ku ²¹⁴]	

なお、ここで挙げた一字多音の例は意味の違いによって使い分けが見られるものもあるが、いずれも本来は只一つの発音であったものである。それが歴史的な変化の中で、複数の発音が並存することになって、使い分けが生じたと考えられる（同義語の棲み分け）。このような状況は、日本語の「コップ」と「カップ」（どちらも英語の cup から）；「ガラス」と「グラス」（どちらも英語の glass から）の違いと似たところがある。本来、一つの語であったのに、声調の違う複数の発音生まれ、担う意味を分担することで（上の例で譬えれば、飲料水を入れる小さな器は「コップ」で、コーヒーや紅茶を入れる器は「カップ」；窓に嵌めてあるのは「ガラス」、ウイスキーやワインを飲むのに使う器は「グラス」というように）、共存するようになったのである。このような意味分担が生じている場合には、元々別の語であったのか、それとも元々同じ一つの語であったのか、判断が難しくなる。

3.3.4.3 「一」、「七」、「八」、「不」の変調

既に<1.普通話（＝北京語）の声調>で紹介済みだが、普通話では第三声に第三声が連続した場合、前の第三声は第二声に変わるという連続変調があることは広く知られている。この場合はどのような字であれ、それが第三声であれば同様に変わる。これに対し、「一」、「不」の変調は個別的である。単独の場合及びどの声調の字が後続するかで、どのように違うか表にすると、以下のようになる。

例字	単独の場合	後続字の声調			
		第一声	第二声	第三声	第四声
一	第一声	第四声	第四声	第四声	第二声
		一天	一齐	一起	一号
不	第四声	第四声	第四声	第四声	第二声
		不说	不行	不买	不去

「衣」や「依」は「一」と同音であるが、「一」のような変調の現象は見られない。例：衣料 yīliào、依靠 yīkào。また「布」、「步」にしても「不」と同音だが、「不」のような変調現象は無い。例：布料 bùliào、步骤 bùzhòu。この現象も要するに、前節で紹介した全清入声字の一字多音現象の一種である。「一」は極めて使用頻度の高い字であり、よく使われるが故に、古来の特徴、つまり詰まった不安定な調子を最後まで持ち続けたのであろう。様々な字が後ろに来るので、特定の語彙ごとに調値が固定するのではなく、後ろにどんな声調の字が来るかで、決まった調値を採るようになった。繰り返しになるが、恐らく前節で取り上げた全清入声字の多読現象も、実は本来、この「一」に見られるような、連続変調現象であったのであろうが、それが徐々に代表的な声調に統一され、よく使われる語彙についてのみ個別の調値として保存されるようになって行ったものである。

「不」は日本の音読みでは「フ」で、入声ではないように思える。中古音に普通話の bù に正確に対応する字音を見出すことはできないが(1)、宋代にできたと思われる『切韻指掌図』という書には p(u)ət という字音が収録されている。一先ずこれをルーツと考えて良からう。「不」も極めて使用頻度の高い語であるが故に、「一」同様の変調状況を呈するようになった。

以前は「七」、「八」についても「七月」、「八月」；「七号」、「八号」のような場合には、それぞれ qíyuè, bāyuè; qīhào, bāhào と発音すると教えられた。実はこれもまた、全清入声字で、「一」と同様の変調現象の現れなのである。これらにおいてもまた第四声が後続する場合に第二声になっている点は注目すべきであろう。

例字	単独の場合	後続字の声調			
		第一声	第二声	第三声	第四声
七	第一声	第一声	第一声	第一声	第二声

		七天	七天	七点	七月
八	第一声	第一声	第一声	第一声	第二声
		八天	八十	八点	八月

数詞は「四」以上になると、途端に使用頻度が大きく落ちる。使用頻度が低いと整理され易く、前節で述べたように、どれか一つの調値で全てを統一するようなことになってしまうのである。「七」、「八」は今では第四声が後続する場合でも、一律 qī,bā と第一声で統一されて発音されるようになってしまった。恐らく他の場合は皆第一声で発音されるので、第四声もこれに倣うようにしたのであろう。実は宮原民平・土屋明治『支那破音字典』によれば、「百」もかつては bǎo という読みがあり、第四声が後続すると、bó と変調した（「百般 bōbān」: 「百姓 bǎixìng」）が、とうに廃棄処分になって、今では用いられることがない。先の「不」も第四声の字が後続する場合以外は全て第四声に発音されるので、もし使用頻度が低ければ、同様の運命を辿って、一律第四声に発音されることになっていたであろう。

清入声でこのような変調があるものは、『支那破音字典』によれば、かつては他にも以下のような類例があった。所拠文献に該当例が挙がっていないところは空欄にしてあるが、初めの 5 字（「剋」、「質」、「識」、「的」、「益、」）は「不」と全く同じ変調パターンを取っていると考えて良いだろう。「識」は普通話では第二声で統一され、第四声は捨てられてしまった。「的」だけは使用頻度が高いからなのか、今猶 dí,dì の二音がある（dī は音訳語用の字音につき対象外とする）。但しもはや変調する例としては認識されていない。最後の例は第四声が後続する場合以外は、一律第三声で発音されていた。

例字	単独の場合	後続字の声調			
		第一声	第二声	第三声	第四声
剋 ke	第四声	第四声	第四声	第四声	第二声
		剋期			剋扣
質 zhi	第四声	第四声	第四声	第四声	第二声
			质子	质朴	质问
識 shi	第四声	第四声	第四声	第四声	第二声
		識丁	識別		識字
的	第四声	第四声	第四声	第四声	第二声

di					的確
益	第四声	第四声	第四声	第四声	第二声
yi		益州		益鸟	益处
尺	第三声	第三声	第三声	第三声	第二声
chi			尺牘		尺寸

第四声が後続する場合に一樣に第二声となっているのはどう解釈すべきか、それ以外の条件のときに何故違いがないのか、こういった問題について、今のところ説得力のある解釈は見出せていない(2)。

『支那破音字典』は「勒」についても *lēi*(~死,~緊,~破)、*lē*(馬~,逼~,~馬)、*lè*(~石,~碑,貝~)、*lé*(~限,~令)の4音を挙げ、*lé*について、「抑ふ、強ひて等の意の場合此音に発音することあり、但し多くは下に去声の字ある場合なり」(pp.149-150)、「勒索」は *lēsuō*, *lésuō* どちらも可」(p.150)と言う。ここで紹介された異読もまた上記の例同様の変調現象であるなら、清入声のみならず、次濁入声にも該当例があることになるが、「勒」以外には見当たらない。

3.3.4.4.清入声、全濁入声、次濁入声の間の派入状況の相違

これまでの推定で、清入声の対応状況の不規則性について一応の理屈が通るが、では何故、全濁入声、次濁入声においてはこのようなバラツキが見られないのか、という問題が出て来る。生理的な観点から見ると、無声子音で始まる入声音節(つまり清入声)の場合、声帯の振動が「声母>介音+主母音>韻尾」の順に「無し>有り>無し」といった連続となっている。それに対し、有声音母の入声音節(つまり、全濁、次濁入声)は、「有り>有り>無し」の連続で、末尾の子音韻尾の部分だけが、声帯の振動が無い。聴覚印象の面で、有声音母の入声音節は長さに関して、舒声(つまり平、上、去声)と大差無かったために、そしてそうであるが故に調値の面でも清入声のように不安定ではなかったために、一樣に舒声化したということなのであろう(3)。

3.3.4.5.北京語入声字の文白異読

もう一点、入声の厄介な点について序に説明しておく。上で清入の例のところ、由来は一つであるのに、複数の声調を持つ例を挙げたが、韻母についても複数の読みを持っていることが少なくない。一部の -k 入声字に見られる、このような一字多音現象は声母の清濁の如何に拘らず存在する。例えば、「烙」は「烙餅 *làobǐng*」

その他、通常では *lào* と発音されるが、「炮烙 *páoluò* : 火あぶりの刑」という時には *luò* と発音される。「絡」も「联络 *liánluò*」その他、通常では *luò* と発音されるが、「络子 *làozi* : 糸巻き」という語のときには *lào* と発音される。「伯」は「伯父 *bófù*」のときには *bó* と発音されるが、「大伯子 *dàbāizi*」の場合には *bāi* と発音される。「柏」も「柏樹 *bǎishù*」のときは *bǎi* と発音されるが、「黄柏 *huángbò*」のときには *bò* と発音される。また「柏林 *Bólin* : ベルリン」、「柏拉図 *Bólātú* : プラトン」といった音訳語にしか現れないようだが、*bó* という読みもある。このような一字多音現象は、「数」を *shù* と発音すると「数える（動詞）」、*shù* と発音すると「数（名詞）」、*shuò* と発音すると「しばしば」を意味するといったようなケースとは異なり、意味の違いには関係が無い。丁度、日本語で「男」を「長男」のときは「チョウナン」と読み、「男子」のときは「ダンシ」と読むというような、語彙ごとに読みが習慣的に決っている状況と似ている（「ナン」と読むか「ダン」と読むかで「男」の意味が変わる訳ではない）。中国語の場合は、それがフォーマルな場で言うとき又は書かれたものを口に出して読むときと日常のくだけた会話で言うときといった違いに応じて使い分けられるものと捉えられ、このような意味の違いを伴わない一字多音現象を「文白異読」と言っている。「文読」が前者、「白読」が後者である。実際には日本語の音読みの使い分けと同じように、口語としてよく使う語彙かどうかによって読みが習慣として個別に決っていると考えた方がよい。今、手元の普通話の辞書で該当しそうな例を挙げると以下の通り。

	A	B	切韻音
烙	<i>lào</i> [<i>lɑo</i> ⁵¹]	<i>luò</i> [<i>luə</i> ⁵¹]	<i>lak</i> (次濁入声)
絡	<i>lào</i> [<i>lɑo</i> ⁵¹]	<i>luò</i> [<i>luə</i> ⁵¹]	<i>lak</i> (次濁入声)
落	<i>lào</i> [<i>lɑo</i> ⁵¹]	<i>luò</i> [<i>luə</i> ⁵¹]	<i>lak</i> (次濁入声)
酪	<i>lào</i> [<i>lɑo</i> ⁵¹]	(無し)	<i>lak</i> (次濁入声)
伯	<i>bǎi</i> [<i>pai</i> ²¹⁴]	<i>bó</i> [<i>po</i> ²⁴]	<i>pak</i> (清入声)
柏	<i>bǎi</i> [<i>pai</i> ²¹⁴]	<i>bó</i> [<i>po</i> ²⁴], <i>bò</i> [<i>po</i> ⁵¹]	<i>pak</i> (清入声)
百	<i>bǎi</i> [<i>pai</i> ²¹⁴]	(無し)	<i>pak</i> (清入声)

実は『切韻』の時代には「烙」と「絡」（と「落」と「酪」）；「伯」と「柏」（と「百」）は全くの同音であった。恐らく北京方言の本来の発音は A タイプの方で、*ao,ou,ai,ei* のような二重母音となるタイプである（韻尾-*u,-i* を持つということ）。B タイプは韻尾が無く、まるで長江下流域などにある入声韻尾 -ʔ を持つ詰まった

発音から、ʔ を取って出来上がったかのような形式である。大都市ではよそから来た者が、様々な異質な方言の要素をもたらす。恐らく B タイプはよそから（多分、南京方言）から借りてきたものであろう。入声以外でもこのようなことは起こったが、平上去声では方言間の韻母の差異は入声ほど音声的な違いが大きいせいなのか、目立たない。現在の北京方言では全ての字についてこのような二通りのタイプが揃って残っている訳でなく、個別の字ごとにどちらか一方だけが残っていることの方が多い。ただでさえ自然淘汰が行われる上に、普通話とは規範言語であるから、このような一字多音は言語政策によって整理され、そのうちの代表的な読み一つだけを残して、後は規範に外れるものとして捨てられてしまう。だから普通話の辞書で、このような一字多音のケースを探しても、なかなか見つからない。

以下、該当例を北京語辞典及び民国期の北京語辞書、国語辞書、解放後の古い辞典に見られるもので補って説明する。このような一字多音をちょっと発音の違いに着目して整理してみると、古代中国語の発音の違いに応じて、A、B の違い方に一定のパターンがあることが分かる。以下の挙例参照。（ ）は古い辞書には収録されていたが、現在では除去されてしまった読み。この状況は清入声字の現代北京方言における声調のばらつきと似ている。上と同じ例があるが、以下では失われた読みを補っている。

A	B	切韻	備考
(i)ou	u,ü		
粥 zhōu[tʂəu ⁵⁵]	(zhù[tʂu ⁵¹])	tʂiəuk (清入声)	
轴 zhóu[tʂəu ²⁴]	(zhù[tʂu ⁵¹])	ɬiəuk (全濁入声)	普通話 zhóu, zhòu
熟 shóu[ʂəu ²⁴]	shù[ʂu ²⁴]	ziəuk (全濁入声)	
肉 ròu[zəu ⁵¹]	(rù[zɤ ⁵¹])	niəuk (次濁入声)	
六 liù[liəu ⁵¹]	lù[lu ⁵¹]	liəuk (次濁入声)	
菊 (jiǔ[tʂiəu ²¹⁴])	jú[tʂy ²⁴]	kiəuk (清入声)	
宿 xiù[çiəu ²¹⁴](xiū[çiəu ⁵⁵])	sù[su ⁵¹](xū[cy ⁵⁵])	siəuk (清入声)	xiù は別由来
(i)ao	e,(u)o,üe		
剥 bāo[pao ⁵⁵]	bō[pə ⁵⁵],bó[pə ²⁴]	pauk (清入声)	
雹 báo[pao ²⁴]	(bó[pə ²⁴])	bauk (全濁入声)	
確	què[te ^h yə ⁵¹](,qiè[te ^h io ⁵¹])	k ^h auk (清入声)	
学 (xiáo[çiao ²⁴])	xué[çyo ²⁴]	fiuk (全濁入声)	

覺 (jiǎo[tciaɔ ²¹⁴])	jué[tcyɔ ²⁴]	kauk (清入声)	jiao[tciaɔ ⁵¹]は別由来
較 (jiǎo[tciaɔ ²¹⁴])	(jué[tcyɔ ²⁴])	kauk (清入声)	jiao[tciaɔ ⁵¹]は別由来

薄 báo[paɔ ²⁴]	bó[po ²⁴]	bak (全濁入声)	薄荷の bò は別由来
落 lào[laɔ ⁵¹]	luò[luo ⁵¹](,lè[lo ⁵¹])	lak (次濁入声)	
鶴 (háoh[xaɔ ²¹⁴])	hè[xv ⁵¹]	fiak (全濁入声)	
脚 jiǎo[tciaɔ ²¹⁴]	(jué[tcyɔ ²⁴])	kiak (清入声)	
鵲 (qiǎo[tc ^h iaɔ ²¹⁴],qiǎo[tc ^h iaɔ ⁵⁵])	què[tc ^h yɔ ⁵¹]	ts ^h iak (清入声)	
嚼 jiáo[tciaɔ ²⁴],jiào[tciaɔ ⁵¹]	jué[tcyɔ ²⁴]	dziak (全濁入声)	
削 xiāo[ciaɔ ⁵⁵]	xuē[cyɔ ⁵⁵]	siak (清入声)	
葉 yào[iaɔ ⁵¹]	(yuè[ya ⁵¹])	jiak (次濁入声)	
略 (liào[liaɔ ⁵¹])	lüè[lyɔ ⁵¹]	liak (次濁入声)	

ai

柏 bǎi[pai ²¹⁴]	bó[po ²⁴],bò[po ⁵¹]	pak (清入声)	
百 bǎi[pai ²¹⁴]	(bó[po ²⁴],bò [po ⁵¹])	pak (清入声)	
拍 pāi[p ^h ai ⁵⁵]	(pò[p ^h o ⁵¹])	p ^h ak (清入声)	
魄	pò[p ^h o ⁵¹]	p ^h ak (清入声)	
白 bái[pai ²⁴]	(bó[po ²⁴])	bak (全濁入声)	
帛 (bái[pai ²⁴])	bó[po ²⁴]	bak (全濁入声)	
陌 (mài[mai ⁵¹])	mò[mo ⁵¹]	mak (次濁入声)	= 貊
宅 zhái[tʂai ²⁴]	(zè[tsv ⁵¹])	ɕiak (全濁入声)	= 择泽

麦 mài[mai ⁵¹]	(mò[mo ⁵¹])	mæk (次濁入声)	= 脉
摘 zhāi[tʂai ⁵⁵]	zè[tsv ⁵¹]	tæk (清入声)	= 谪
责 (zhái[tʂai ²⁴])	zé[tsv ²⁴] (,zè[tsv ⁵¹])	tʂæk (清入声)	
册 (chǎi[tʂ ^h ai ²¹⁴])	cè[ts ^h v ⁵¹]	tʂ ^h æk (清入声)	
获 (huái[xuai ²⁴])	huó[xuo ⁵¹]	fiuæk (全濁入声)	

ei

北 běi[pei ²¹⁴](,bèi[pei ⁵¹])	(bò[po ⁵¹])	pæk (清入声)	
得 děi[tei ²¹⁴]	dé[tv ²⁴]	tæk (清入声)	
德	dé[tv ²⁴](,dè[tv ⁵¹])	tæk (清入声)	

剋	kēi[k ^h ei ⁵⁵]	kè[k ^h ɤ ⁵¹]	k ^h ək (清入声)
黒	hēi[xei ⁵⁵] (,hēi[tei ²¹⁴])	(hè[xɤ ⁵¹])	xək (清入声)
賊	zéi[tsei ²⁴]	(zè[tsɤ ⁵¹])	dzək (全濁入声)
肋	lèi[lɛi ⁵¹]	(lè[lɤ ⁵¹])	lək (次濁入声) 普通話は lèi,lè

先に指摘したように、北京語の全てに亘ってこのような形式の異なる層が共存しているという訳ではなく、-p や -t で終わるものにはこのような韻母の形の違いはない(声調の分岐はある)。専ら -k で終わるものにおいてのみこのようなことが起きた。k は調音点が奥なので、舌の奥を上顎(軟口蓋)につけて k を発すると同時に唇を丸めるなどの他の動作をすることが可能である。例えば ak>a^wk>auk>au?⁵⁵>au ; ek>e^wk>ei?⁵⁵>ei などのように、-k に至るその直前の母音の音色の変化が -u や -i のかたちで残ったのだろう。ここで a^wk は a を発音した後、唇を丸めながら k を発音する、ということの意味している。e^wk の方は e を発音した後、キャ、キュ、キョのキの子音のような k を発音する、ということの意味している。このような音声記号の使い方はちょっと普通ではないのだが、どちらも状況を理解してもらうための便法である。

『切韻』の推定音価と現代の普通話の読みを比べる場合、普通話にはこのような形式の異なる層の一方だけしか残っていない場合が多いので、対応の規則性が把握し難いのである。試しに上の挙例から () の部分を取り去って見てみると良い。また「確」、「魄」、「徳」は A の欄が欠けているが、他と比較して、それぞれ拼音で表記すれば、qiao,pai,dei といった形式があっても良さそうである(声調不明としておく)。このような入声字の両読現象をテーマにした劉淑学《中古入声字在河北方言中的读音研究》では、この3字を含め、多くの入声字を扱っている。その<528 个常用入声字在河北省 24 市县方言中的读音>pp.141-213 によれば、北京周辺に位置する高陽県ではこの3字にはそれぞれ、tɕ^hye^{去声}、tɕ^hiau^{去声}、p^ho^{去声}、p^hai^{去声}(近くの順平県では p^hai^{上声})；tv^{上声}、tei^{上声}といった形式が存在している。同書によれば、3字にこのような両読現象が見られる河北方言は少なくなく、他の 10 以上の地点でも同様であるが、委細省略。<3.3.4.2 舒声への合流>で挙げた昌黎方言でも「確 tɕ^hye⁵⁵(陰去)、tɕ^hiau⁵⁵(陰去)、「魄 p^hai⁵⁵(陰去)」といった形式がある。但し「魄」はこの1音のみで、p^ho^{去声}に当る読みは無い。「徳」は tv¹³(陽平)、tv²⁴(陽去)という字音は見られるが、tei に相当する形式は見られない。こういった状況から、北京でも qiao,pai,dei に当る形式はかつて存在していたが、早くに文読形式との生存競争に負けて、淘汰されてしまったものと推測される。

3.3.4.6.体系的な空き間の利用

ここで注意しておくべきことは、全濁入声は声母が無声無気音になって、陽平(=第二声)に合流するが、『切韻』平声由来の陽平には、無声無気音の声母のものはあり得ないということである。体系的に空き間になっている。そこへ全濁入声のものが、無声無気音声母となって入り込み、その結果、第二声にも無声無気音の音節があることになり、無声有気音の音節同様、無声無気音声母の音節もまた、第一声と第二声の声調の違いだけで区別されるような対が存在することになった。以下の例の左半分を参照。言うまでもなく、第一声の方が『切韻』平声由来、第二声の方が入声由来のものである。

陰平（第一声）	陽平（第二声）		
	全濁入声	全清入声	全清入声
巴 bā[pa ⁵⁵]	— 拔 bá[pa ²⁴]	cf. 八 bā[pa ⁵⁵]	—
歌 gē[ky ⁵⁵]	—	cf. 鵠 gē[ky ⁵⁵]	— 革 gé[ky ²⁴]
皆 jiē[tcie ⁵⁵]	— 傑 jié[tcie ²⁴]	cf. 接 jiē[tcie ⁵⁵]	— 結 jié[tcie ²⁴]
低 dī[ti ⁵⁵]	— 笛 dī[ti ²⁴]	cf. 滴 dī[ti ⁵⁵]	— 嫡 dī[ti ²⁴]
租 zū[tsu ⁵⁵]	— 族 zú[tsu ²⁴]	cf.	— 足 zú[tsu ²⁴]
遮 zhē[ʧv ⁵⁵]	— 轍 zhé[ʧv ²⁴]	cf. 蜚 “螿也” zhē[ʧv ⁵⁵]	— 哲 zhé[ʧv ²⁴]

清入声（全清入声、次清入声）の変化には規則性が見られないということであった。中には陽平に合流するものもある。だから全濁入声字は必ず普通話で第二声無気音声母になっているとは言えるが、逆に普通話の第二声の無気音声母のものは全てが全濁入声字由来であると言うことはできないのである。上の右半分の cf. の部分を参照。ただ、入声字で陽平に合流するものの圧倒的多数はやはり、全濁入声由来のものである。いずれにせよ、第二声の無声無気音声母のものは、入声由来のものしかない。同様に普通話の第二声の有気音声母のものは全濁平声由来のもの他に次清入声由来のものが有り得るので、全濁平声なら全てが普通話では第二声の有気音となっているとは言えるが、普通話で第二声の有気音声母なら全てが全濁平声由来と言うこともできないのである。但し具体例を点検してみると、次清入声由来の第二声有気音の実例は極めて少ないので、無視したとしても大きな問題は生じないだろう。前節で挙げた次清入声の例のほとんどが陰平もしくは去声となっている点は注目すべきである。以下の例は参考までに摩擦音声母のものも含んでいる（----以下の例）。中古音の h,ç,s は次清ではなく、全清に属する。

全濁平声	—	次清入声	—	全濁入声
荏 <i>dza</i> > <i>chá[tʂ^ha²⁴]</i>	—	察 <i>tʂ^ha</i> > <i>chá[tʂ^ha²⁴]</i>	—	
(該当字無し)	—	壳 <i>k^hauk</i> > <i>ké[k^hʷ²⁴]</i>	—	
符 <i>byu</i> > <i>fú [fú²⁴]</i>	—	拂 <i>p^hʷət</i> > <i>fú [fú²⁴]</i>	—	福 <i>p^həuk</i> > <i>fú [fú²⁴]</i>

鞋 <i>fai</i> > <i>xié[çiə²⁴]</i>	—	脅 <i>hiap</i> > <i>xié[çiə²⁴]</i>	—	協 <i>fiep</i> > <i>xié[çiə²⁴]</i>
時 <i>ziǝi</i> > <i>shí[ʂɿ²⁴]</i>	—	識 <i>çiǝk</i> > <i>shí[ʂɿ²⁴]</i>	—	十 <i>ziǝp</i> > <i>shí[ʂɿ²⁴]</i>
		昔 <i>siek</i> > <i>xí[çi²⁴]</i>	—	席 <i>ziek</i> > <i>xí[çi²⁴]</i>
		菽 <i>çiǝuk</i> > <i>shú[ʂu²⁴]</i>	—	孰 <i>ziǝuk</i> > <i>shú[ʂu²⁴]</i>

既に指摘したように、入声の韻母には *-p, -t, -k* という子音韻尾があった。これらが消失して、平上去声のいずれかに合流していくということは、出来上がった韻母の形には一定の制約があるということである。当然のことながら、これらが *-m(>-n), -n, -ŋ* のような鼻音韻尾を持つ韻母に変化することはあり得ない (*-m* は北京語の祖先の段階で、*-n* に変化してしまった)。『切韻』の全清 (つまり無声無気音) 平声は陰平、つまり普通話の第一声となり、第二声になることはなかった。平声由来の第一声無声無気音声母音節には、*-m(>-n), -n, -ŋ* の韻尾を持つものが有り得るが、入声由来の第二声無声無気音声母音節には、*-m(>-n), -n, -ŋ* の韻尾を持つものは有り得ない。先のような無声無気音声母のものが第一声か第二声かといった声調で区別されるものには、*-m(>-n), -n, -ŋ* の韻尾を持つ韻母は有り得ないのである。だから例えば、*bō:bó,dī:dí,guō:guó,zāo:záo,jiē:jié* などのような対立はあっても、*bān:*bán,dāng:*dáng, jiān:*jián, zhuān:*zhuán,gōng:*góng* のような鼻音韻尾を持つ音節の対は存在しない (* は存在し得ないことを意味する)。

なお、『切韻』の次濁平声も陽平 (= 普通話第二声) となり、陰平 (= 第一声) のものは存在しないということを既に指摘した。次濁入声は陽平にならずに、去声 (= 第四声) になったから、第一声には鼻音、流音で始まるものは無く、この空間が埋められることはなかった。*māi,mēi,miān,nāi,nēng,lāi,lān* などは理論上有り得ない。しかし現実には第一声のものは辞書をひもとくと結構見つかる。それらは擬音語や俗語的な常用語彙で、中には非常に口語的である余りに、古くから存在しているのにもかかわらず、古代の辞書に登録されなかったというものもあるが、やはり体系的な隙間を埋めるように、新たに次濁第一声の語彙が個別的に誕生したのであろう。普通話の声母、韻母の組み合わせ状況を見ると (手頃な初級中国語テキスト巻末の音節配合表を参照されたい)、空白部分が随分多く、不経済な体系である

ことが分かる。こういった音節配合表では声調ごとの組み合わせまででは示していないので、実感が湧き難いかもしれないが、次濁第一声の字の存在もまた、このような体系上の不経済を解消しようとする表れであると見なしておく。それは丁度、本来濁音で始まる言葉を持たなかった日本語が、中国語の影響を受け、いつしか漢字で構成される語彙に倣って、「べに(紅)」、「どろ(泥)」、「でる(出る)」のような、濁音始まりの固有の語彙を持つようになったことを考えれば、決して不思議なことではない。

3.3.4.7.全清入声字の読みの層分け

清入声字がどの声調に合流するかということについては、ランダムであると言った。実はそれは他所からもたらされた要素が混在することが影響している、ということを指摘しておこう。前節の<3.3.4.5.北京語入声字の文白異読>で示した A, B の例を見ると、それぞれで声調の現れ方に規則性らしきものが見られることに気付いたであろうか?これは恐らく、本来の北京語の体系では -k の全清入声は -i, -u 韻尾を持つ A タイプでは、ほとんどが第三声である(勿論、例に混じる全濁、次濁入声は除く)のに対し、韻尾を持たない B タイプはほとんどが第二声か第四声である。後者は文白異読で分ければ、概ね文読とされるもので、他所から借用されたものであろうと予想される(フォーマルな場での発音とは余所行きならぬ余所来の発音)。-p, -t 終わりの全清入声の場合は韻母の形式に違いが見られないので、A, B に分けることができないが、恐らくは第三声で表れるのが本来の北京語であって、第二声は他所からもたらされたものとして分けられるのではないかと思う。勿論、既に指摘したように、不安定な調値であったものが、特定の語彙の中で固定してしまい、それが代表権を得て、他の場合も同様に読まれるようになったケースもあるであろう。例えば A の「拍」が第一声で現れるのは、そのようなことで説明が付くかも知れない。

3.3.4.8 「一」、「七」、「八」、「不」の変調再論

<3.3.4.3 「一」、「七」、「八」、「不」の変調>で扱った例は全て文読に属する字音のように見える。もしそれが言えるならば、或いは北京に齎された子音韻尾を持つ他方言の入声字音が北京語に受容されるに際して、その不安定な調値がこのように処理されたということかも知れない。そしてその頃、北京語においては固有層に属する入声の読みは、清入声を含め、全ての入声が既に全て舒声化していたという可能性も考慮せねばならなくなる。

しかし「一」や「不」のような使用頻度の極めて高い語彙の発音を借用形式に改めるということは考え難い。そもそも<3.3.4.3 「一」、「七」、「八」、「不」の変調>で扱った例には韻母の特徴に関して文白異読の現象が無いものばかりで、pp.119-120の表中の字では、「剋 ke」しか別に白読形式を持つものは無い (kei)。母音韻尾だと舒声由来の字音と区別が付き難く、ために調値は安定に向かい易かったということもあろうか。たとえ上のような状況であったにせよ、「一」、「七」、「八」、「不」などに見られる個別の変調はやはり借用によって生じたのではなく、北京語本来の変化の中で生じた一種の化石現象（古い特徴が極少数の個別の語彙にのみ残っている状況）とみるべきである。

4.おさらい

これまで古代の声調の分類に従って、各声調毎に普通話の四声との対応を見てきた。入声以外の韻母の場合はこれまでの図式の a を ai, an, aŋ; əi, əu, əŋ その他の当該韻母に置き換えて、右倣え式に考えれば良い。入声についてだけ、以下に掲げておく。入声韻母を仮に at で代表させる。-p 入声の場合は t を p に代えて考えれば良い。主母音についても適宜他のものに代えて考えれば良い。これまでと異なり、拼音の方を // で括って、音声記号と区別する。清入声の対応はとりあえず調類名としては「陰平？」とし、拼音では /ā?/, /āo?/, /āi?/ などのように表記しておく。

	1	2	3	4
切韻	pat 入声	p ^h at 入声	bat 入声	mat 入声
普通話	pa 陰平? /bā?/	p ^h a 陰平? /pā?/	pa 陽平 /bá/	ma 去声 /mà/

-k 韻尾の入声の場合は、韻尾の消失に母音の変化が加わる。I、I' は北京固有型、II は借用型と言うべきものである。II のみ<3.3.4.5.北京語入声字の文白異読>の挙例に見える大雑把な傾向に基づき、一先ず、清入声の対応を I、I' とは異なるものにしてある。

	1	2	3	4
切韻	pak 入声	p ^h ak 入声	bak 入声	mak 入声
普通話 I	pau 陰平? /bāo?/	p ^h au 陰平? /pāo?/	pau 陽平 /báo/	mau 去声 /mào/
普通話 I'	pai 陰平? /bāi?/	p ^h ai 陰平? /pāi?/	pai 陽平 /bái/	mai 去声 /mài/
普通話 II	pə 陽平? /bó?/	p ^h ə 去声? /pó?/	pə 陽平 /bó/	mə 去声 /mò/

今度は四声相配する韻母の間でどうなっているかを pan, pat; ban, bat; man, mat という音節で代表させて見ると、以下の通り。

切韻	pan ^{平声}	pan ^{上声}	pan ^{去声}	pat ^{入声}
普通話	pan ^{陰平} /bān/	pan ^{陰上声} /bǎn/	pan ^{去声} /bàn/	pa ^{陰平?} /bā/?
切韻	ban ^{平声}	ban ^{上声}	ban ^{去声}	bat ^{入声}
普通話	p ^h an ^{陽平} /pán/	pan ^{陽上声} /bàn/ =	pan ^{去声} /bàn/	pa ^{陽平} /bá/
切韻	man ^{平声}	man ^{上声}	man ^{去声}	mat ^{入声}
普通話	man ^{陽平} /mán/	man ^{陰上声} /mǎn/	man ^{去声} /màn/	ma ^{去声} /mà/

p^han, p^hat は pan, pat に ^h を付け、拼音の b を p に代えれば良い。他の声母、韻母の場合ではどうなるか、それは自分で考えてみてもらいたい。

注

(1) 『切韻』(厳密にはその増補版の『広韻』)には全部で4種の発音が収録されており、もし規則的に変化していれば、これらは fū[fu⁵⁵]か fōu[fōu⁵⁵] (<piǒu^{平声}), fū[fū²¹⁴]か fōu[fōu²¹⁴] (<piǒu^{上声}), fū[fū⁵¹]か fōu[fōu⁵¹] (<piǒu^{去声}), fū[fū⁵⁵?](<pyǒt^{入声})となるはずである。このいずれれも否定辞の意味を持っており(「弗也」とある)、うち前三者はいずれも「フ」に対応する資格あり、ということが出来るが、いずれも発音の一致という点で普通話の bù に正しく対応しているとは言えない。piǒu に平声、上声、去声の3つの声調の異なる音があったということは、否定辞は使用頻度が極めて高く、後ろに動詞の音節が後続することが多い。ぞんざいに軽く発音されるが故に、声調が一定せず、平声、上声、去声のいずれでもあり得たということだろう。pyǒt にしてもこのような不安定な声調の piǒu が、ぞんざいに軽くそして短く発音されることで、遂には入声でもあり得るようになったということだろう。y は i と u がくっついて出来ると見せる。ぞんざいに発音されることで、拗介音の要素(i)を脱落させ、p>f の条件を失って、pyǒt > puǒt > puat のように変化したのではないか。『広韻』以前の切韻系韻書には平声、上声、去声の三音は収録されているが、入声の字音は収録されていない。四音いずれも否定辞の意味を共通に持っているの、入声音 pyǒt が piǒu から変化して出来た可能性は十分にある。但し何故、新たに生じた入声韻尾が、-k でもなく、-p でもなく、-t であるのかという点については検討が必要である。

興味深いことに、唐代のチベット文字資料で「不」を pu と表記する例がある。チベット文字では f は普通 ph で表記する。-t を表記することができるのにそれが無いということは、これは、piǒu が拗介音を脱落させて、piǒu>pǒu>pu のような特殊な変化を生じたことを示すものかも知れない。つまり表記のごとく [pu] という発音を表わしていたのかも知れない。ならば piǒu から pyǒt が生まれたと想定するように、pu から puat が生じた想定することも可能であり、この pu は pyǒt と共に『切韻指掌図』に見える p(u)ǒt

の直接の祖先の資格を持つことになる。唐代チベット文学資料の「不」puについては、高田(1988) pp.98-99 参照。

- (2)このような声調調値に落ち着いた頃の北京語の声調体系がどのようなものであったか分からないので、変調調値についても憶測の域を出ない。清入声が舒声化する過渡的段階で、かなり不安定であった頃、第四声の始発高度が高く、それにスムーズに移行できるように、末端高度を高めた。それが第二声の調値と一致したということかも知れない。これは場当たりの説明に過ぎない。初めの5字(「剋」、「質」、「識」、「的」、「益」)は、他の三つの声調が後続する場合に、何故同じ声調となるのか。第一、二、三声はといずれも始発高度が低かったので、清入声の変調調値は末端高度が低くなったと論証できれば面白い。但し前節<3.3.4.2 舒声への合流>に挙げた一字多音の例は本節の例と必ずしも一致してはいないので、一般化するには、先ず個別の例に仔細な検討を加えることが必要である。

清末民国初期にはあらゆる入声を一律第四声に発音する読書人がいたという話がある。人口的な発音である可能性が高いが、もしも現実の口語音であったのであれば、何らかの関連性を検討してみる余地がある。

- (3)もしそうであるならば、北京語及びその他の多くの北方方言の祖先となる方言において、全濁入声は無声化する前に陽平に近い調値をとっていたのであろう。唐代長安音では既に平声の陰陽分裂は生じていた。全濁平声と全濁入声は、後者が依然子音韻尾を持ちつつ、前者に類似の調値を採っていて、声母の無声化と入声韻尾の消失を契機として、無声有気音第二声となった全濁平声との間に差異を保つために後者は無声無気音になったということかも知れない。以上は単なる憶測である。次濁入声と全濁入声でどうして異なる派入状況を呈するのか、或いは次濁平声との合流を回避すべく、別の声調に派入したということであろうか。但しどの声調に派入するにせよ合流は起こる。現実には去声に派入し、次濁去声と合流している。説得力のある説明は現在持ち合わせていない。ひょっとすると声調の陰陽分裂以前に全濁声母の無声化は既に始まっていて、清入声声母となおも差異を保ちつつ、音節の中の声帯が振動する部分の長さにおいて、次濁入声と違いが生じていて、それが派入状況が異なる要因となったのかも知れない。

参考文献

北京語、国語、普通話の入声の読み

宮原民平・土屋明治『支那破音字典』, 文求堂書店, 1932,358+20p.

王璞《京音字彙》, 民國書局, 1913, 379p.

王璞《國音京音對照表》, 商務印書館, 1921, 48+18p.

教育部國語統一籌備委員會《國音常用字彙》, 商務印書館, 1932, 286+76p.

Goodrich, Chauncey *A Pocket Dictionary(Chinese-English) and Pekingese Syllabary*, American Presbyterian Mission Press, 1921.,237+70p.,Shanghai

- 長田夏樹「北京文語音の起源に就いて」、『中国語学研究会会報』10,1953,pp.1-5
平山久雄「中古入声と北京語声調の対応通則」、『日本中国学会報』第12集,
1960,pp.139-156
高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究』, 創文社, 1988, 465p.

中国語方言における入声の読み

- 河北 : 刘淑学《中古入声字在河北方言中的读音研究》, 河北大学出版社, 2000,
218p.
河北昌黎: 河北省昌黎县县志编纂委员会・中国科学院语言研究所《昌黎方言志》,
科学出版社, 1960, 283p.
河南洛阳: 贺巍《洛阳方言研究》, 社会科学文献出版社, 1993,191p. **略称《賀》**
洛阳市地方史志办公室《洛阳方言志》, 河南人民出版社, 1987, 117+1p.
略称《志》
山东荣成: 张卫东《荣成方言》, 1982年研究生毕业论文(北京大学中文系专业),136p.
略称《張》
王淑霞《荣成方言志》, 语文出版社, 1995, 247p+1 地图 **略称《王》**
重庆 : 翟时雨《重庆方言志》, 西南师范大学出版社, 1996, 410p. **略称《翟》**
四川方言调查工作指导组《四川方言音系》, 1960, 123+18 地图 **略称《四》**
甘肃兰州: 兰州市地方志编纂委员会、兰州市方言志编纂委员会《兰州市志 第59卷
方言志》, 兰州大学出版社,2002 第1版; 2004 第1次印刷,621p.
略称《市》
高宝泰《兰州方言音系》, 甘肃人民出版社, 1985, 273p. **略称《高》**

*本稿はとある講習会で音韻学の初歩を講じたときに受けた質問をきっかけに作成したものである。本来が講義原稿を意図して執筆したもので、厳密さを犠牲にして平易に就いている(つもりである)。そのため、当然触れるべき先行研究や引用文献名が挙がっていないというような問題がある。その一方では言わずもがなの説明の部分が少なくない。かかる論文集に掲載できるような論文の体を成していないとの誹りを受けそうであるが、この内容に関して纏めて紹介するような著作は管見の及ぶ限りで見つからない。読者においては定説の紹介の中に若干のオリジナリティを見出して頂ければ幸いである。なお、本稿を作成後、現在まで実際にこの内容を講ずる機会は無かった。今後も余り期待すべきではないだろう。